

「アスリートとして生きることと消尽の体験に関する社会学的研究」研究経過報告

浜田雄介*

要旨

本研究では競技スポーツにおいてただ自らの力を使い果たそうとする消尽の体験が、アスリートとして生きていくうえでどのような意味を持つのかを明らかにすることを目的とした。主たる活動として、本研究ではトライアスロン大会における現地調査およびトライアスリート（トライアスロン選手）や競技関係者に対するインタビュー調査を実施した。研究の進展に伴って、一概にプロともアマチュアとも言えない「第3のアスリート」の存在が重要な論点として新たに浮上した。

キーワード：スポーツ社会学，アスリート，消尽，トライアスロン，キャリア

1. 研究の背景と目的

東京オリンピック・パラリンピックも間近に迫り、アスリート（スポーツ選手）への社会的期待と関心はますます高まっている。一方で、競技引退後のセカンドキャリアへの移行において生じる不適応や、激しい競争のなかで自分を見失うバーンアウトのようなアスリートに特徴的な困難は、深刻な問題になっている。またたとえ将来の見通しも立たず低い賃金に甘んじようとも、アスリートとして競技生活を続けようとする若者も多く存在している。平成25（2013）年度の日本スポーツ社会学会大会では、このようなアスリートの現状と未来を問うシンポジウムが開催された（アスリートはどこへ行くのか？：「難民」なのか／自己実現なのか）。これらのことに鑑みると、アスリートを対象とした研究はスポーツ社会学分野の重要課題になっていると考えられる。

それでは、時として大きな困難や問題を伴うにも関わらず、なぜアスリートは競技とともに生きようとするのだろうか。これまで報告者は市民スポーツのレベルにおいて、マラソンやトライアスロンのような長時間にわたる苦痛を特徴とするエンデュランススポーツを対象とした研究を行ってきた。特に直近の研究課題（科学研究費助成事業若手研究（B），課題番号：JP15K16478）から見出されたのは、苦痛を介して自らを限界へと追いやり、持てる力を使い果たそうとするなかで活力ある生を実感する消尽の体験だった。現代社会において人々がエンデュランススポーツに向かう論理を、体験という人間の内的な側面から捉えたことが、当該研究課題の成果の要点だった。

* 京都産業大学現代社会学部

スポーツにすべてを賭けるアスリートは、競技の最中に強烈な消尽を体験していると推察される。したがって本研究ではトライアスロンの事例から、競技スポーツにおける消尽の体験がアスリートとして生きていくうえでどのような意味を持つのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の経過

主たる研究活動として、国内最高峰のトライアスロン大会である「日本トライアスロン選手権」（東京都）ほか2大会における現地調査およびトライアスリート（トライアスロン選手）1名、スポーツジャーナリスト1名、大会関係者1名に対するインタビュー調査を実施した。現地調査では競技中にどのような形で消尽が生起するのかを動的に記録するために、デジタルビデオカメラによる映像撮影を行った。またインタビュー調査からは、国内のトライアスロンの競技環境や選手の競技に対する価値観などに関する情報を得ることができた。特にエリートと呼ばれるカテゴリーで活動するトライアスリートへのインタビューについて言及すると、スポーツ（トライアスロン）でしかなしえない体験が、アスリートとしてのキャリア選択や継続において重要な意味を持っていることが示唆された。ただし今回語られた体験（例えば競技中にすべてをコントロールできているかのような感覚）はチクセントミハイが提唱したフロー [Csikszentmihalyi, 1975=2000] に近いとも考えられるため、体験の質を区別する理論の精査が今後の課題となった。

そのほかの活動として、まず体験を捉える方法論に関して、NHK番組アーカイブス学術利用トリアル採択課題である「スポーツ体験の表象化に関する研究：スポーツドキュメンタリー番組の分析を通して」（研究代表者：小丸超）に取り組んだ。この研究では一般化や表象化が困難なスポーツ体験に、いかにして映像メディアが迫ろうとしているのかを考察した。結果として、自分の経験だけにもとづくのでも客観的な観察でもない、対象に寄り添い共感しながらお互いの認識をすり合わせていく「対話」の有効性などが導出された。

また国内の多くのアスリートにとって不可分なものと考えられる体育会系をテーマとした共同研究に参加した。その成果として、「体育会の研究：悪質タックル問題に関する資料・報道から見えてくるものとは」（西日本スポーツ社会学会第24回大会、於岡山大学）および「共同研究：体育会系の社会学—われらのうちの体育会系なるもの 第1報告 体育会系の諸特徴の抽出と整理」（日本スポーツ社会学会第28回大会、於福岡大学）という2回の研究発表を行った。

3. 今後の研究の展開

研究の進展に伴って、例えば定職に就かず競技第一の生活を送りながらも競技だけでは生計を立てられないといった、プロともアマチュアとも言えないアスリートの存在が重要な論点として新たに浮上した。このようなアスリートを「第3のアスリート」としてカテゴリー化するならば、その特徴は競技と競技生活を支える活動とでキャリアが複線化している点にある。

企業運動部の衰退、地域密着型プロスポーツやクラブチームの拡大、世界レベルで争う競技種目の

多様化などといった近年の国内のスポーツ環境の変化に付随して、第3のアスリートが増えていくことが予想される。しかしながら第3のアスリートはまだその存在が認識され始めて間もないため、彼ら／彼女らのキャリアを対象とした実証的な研究は蓄積されていない。したがって今後は特にスポーツ体験の希求と生活の現実的な側面とのあいだの折り合いに着目しながら、いかにして第3のアスリートが自身のキャリアを形成しているのか、またそのキャリアにはどのような展望や問題が内在しているのかといったことを明らかにしていきたい。

付記

本研究は京都産業大学総合学術研究所特定課題研究（準備研究支援，課題番号：E1818）の助成を受けたものである。

文献

Csikszentmihalyi, M., 1975, *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play*, Jossey-Bass（今村浩明訳，2000, 『楽しみの社会学 改題新装版』, 新思索社）。

An Interim Report of a Sociological Study on Athletes' Careers and Expenditure

Yusuke HAMADA

Abstract

The purpose of this study is to explore how lived experiences of athletes' expenditure in competitive sports are positioned in lifelong careers of them. I conducted fieldwork in triathlon races and interviewing with a triathlete and other people who were involved in the sport. As the data analysis progressed, the existence of "third athletes" that is neither professional nor amateur has emerged as a new, important concept.

Keywords: Sport Sociology, Athlete, Expenditure, Triathlon, Career